ある運転手との出会いから

渡辺寿美子

あれほど強い印象を受けたのは、滋賀を発つ前に目にした、開きかけの桜の花二輪が、あまりにも愛らしかったからかもしれない。千歳空港に着陸する時、飛行機の窓から見えた水墨画そのものの景色に、心がひるんだからかもしれない。

三月末に、北海道に訪れた時の事である。私は、空港から、ＪＲ快速「エアポート」に乗車する代わりに、宿泊するホテル近くまで運んでくれる高速バスを選択した。

バス停で待つ間、斜めに降る雪は、私の心の中にまで舞い込んで、冷たく積もっていくようであった。数分後にバスは、到着した。横腹に荷物を収納できる大型バスだった。

運転手は、やせた、背の低い、色黒の五十代位の男性だった。この運転手は、私達がバスに乗り込む時から、違っていた。一人一人の乗客を見ながら、足の悪いおばあさんには、座席から立ち上がり、手を差し伸べた。前列一列目は、荷物置き場になっていた。乗客は、大き目の荷物は、このスペースに置いていった。運転手は、発車する前に、確認し、安定するように置き直し、それでも、置ききれない荷物は、その持ち主に、座席で持つように伝えた。その表情が、言葉で表現していなくとも、「すみませんが」や「申し訳ないですが」が、こちらに伝わってくるのである。ボタンで降車停留所を知らせるバスであったが、降車ボタンが押されていないバス停は、その手前で速度を緩め、『○○、通過します。』と、確認のアナウンスがあった。その声色には、温かみがあり、やさしさにあふれていた。

乗務員が乗客を大切にするのは、当たり前のことかもしれない。それが、その職業の枠内に留まるのであれば、何らの感動も引き起こさないであろう。その人の人柄あるいは、その人そのものから、自然とにじみ出てきたものには、人の心を動かす力があるのでは、ないだろうか。

もちろん、私が非日常生活の中にある、多少なりとも不安を抱く旅人であるから、

運転手の言葉や態度が心に響いたのかもしれない。また、車内放送は、すべて録音テープに任せ、ハンドルを握り運転するだけの、ワンマンバスの運転手に、あまりにも多く出会ってきたからかもしれない。

このバスの中でも、録音テープは、流れていた。私の耳は、停留所の名前だけを聞き取り、降りるバス停であるかどうかを確認していく。だが、その音声は、私の耳を素通りしていくのである。女の人の美しい声が使われているが、テープという器械を通すだけで、ガラス越しの、血の通わない声になってしまい、心まで届かないのである。

運転手との出会いは、私の心に、一つの思い出を連れてきてくれた。

それは、中学生時代のことである。私の通っていた中学校は、家から離れており、毎日バス通学していた。二年生くらいまでは、バスの中に、運転手の他に、車掌がいた。濃い紺色の制服を着ており、学生帽のような帽子をかぶっていた。首からは、黒いかばん（ちょうどがまぐちを巨大化した感じのもの）をかけていた。車内では、切符の販売、切符や定期の拝見、乗客の降車停留所を運転手に知らせ、バスが通りにくい場所では、バスの誘導もしていた。たいがいの車掌は、世話好きで、話好きだった。通勤ラッシュの時は別だが、昼間の乗客の少ない時に、乗り合わせると、「今、何年生や？」「何人兄弟や？」「おっちゃんとこな、あんたぐらいの孫、三人いるんやで。」と話しかけてきた。内向的で、しゃべるのが苦手な私でも、車掌に話しかけられると、構えずに、言葉を返せた。あの時のしわの多い車掌の楽しそうな顔がよみがえってきた。

運転手は、一人で、車掌の役割も果たしているのではないかと思える。あのバスの中の空気を和らげ、潤滑油になって、働いてくれた・・・。

車窓から見えるのは、店の名前が、でかでかと書かれた看板、どこにでもある量販店、雪が高く積み上げられた歩道、葉のない枝々を広げ、黒々とした林をなす広葉樹、常緑樹でさえ、くすんださえない葉の色をしている。そんな景色を目にしながらも、私の心の中では、一輪、また一輪と花が開いていくのを感じた。

抱えていた不安が、来てよかったという安心感に変わっていく。旅そのものの色合いが明るい色に染まっていく。

「人と出会う」ためにここに来たとさえ思えてくる。

あの運転手と出会って、一週間が経つ。今も、運転手の言葉は、甘美な音楽となっ

て、私の心にとどまり、ふとした拍子に、やさしく耳に戻ってくるのである。